



認知機能とその仕組みに関する研究

保健福祉学部 コミュニケーション障害学科
教授 伊集院 睦雄 (いじゅういん むつお)

連絡先 県立広島大学 三原キャンパス 4430 号室
Tel : 0848-60-1120 Fax : 0848-60-1134
E-mail ijuin@pu-hiroshima.ac.jp

専門分野 : 認知心理学, 認知神経心理学

キーワード : 認知, 読み, 記憶, 認知加齢, 認知症

● 現在の研究について

人間のこころ（ここでは認知機能）という目に見えないものを理解するため、心理学では様々な研究アプローチが用いられてきました。代表的には、①行動データの収集を通して事実を蓄積する実験や調査、②不幸にして認知機能が障害された症例の呈する多様な症状の観察、③特定の認知機能をソフトウェアの形でコンピュータ上に実装し、その振る舞いを観察するシミュレーション、などがあります。現在、これら三つのアプローチを目的に合わせて使い分けながら、言語コミュニケーションを支えている以下のような認知機能の基礎的研究に取り組んでいます。

1) 「読み」の仕組みとその障害に関する研究

人間が単語を読む際、頭の中にどのようなメカニズムを想定する必要があるのでしょうか？またそのメカニズムを支えるどの構成要素が壊れると、どのような症状が現れるのでしょうか？これらの問題を明らかにするため、健常者を対象とした音読実験、読みに障害を持つ症例が呈する読み誤りの観察、そしてコンピュータ・シミュレーションによる破壊実験を行い、「読み」の仕組みを研究しています。

2) 高齢者の舌端現象に関する研究

言語能力は加齢の影響を受けにくく、60歳を超えて緩やかに低下すると言われていますが、喚語は40歳からすでに低下し始め、知っているはずの名前が出てこないという舌端現象（「喉まで出かかっている」状態）は高齢者

の方で顕著に認められます。なぜ、加齢により喚語能力が低下し、舌端現象が生じやすくなるのでしょうか？そのメカニズムを心理実験とシミュレーションから検討しています。

3) 意味記憶のメカニズムに関する研究

我々が持っている語彙や知識に関する記憶は、個人的に経験した思い出の記憶とは異なり、意味記憶と呼ばれるシステムに蓄えられていると考えられています。このシステムが選択的に障害されている意味性認知症例の記憶機能を詳細に調べることにより、意味記憶がどのようなメカニズムになっているのかを明らかにしようとしています。

● 今後進めていきたい研究について

記憶には、加齢により衰える機能と衰えない機能があります。また、適切な助けがあれば、衰えた記憶機能を補える場合があります。こうした記憶の加齢変化に関する研究は、高齢者がストレスの無い生活を送る上で大変重要だと考えています。またこの研究は、簡便で鑑別力の高い認知症スクリーニング検査の開発に繋がります。

● 地域・社会と連携して進めたい内容

上記の研究を自治体等や医療機関と連携して進めていきたいと考えています。

● これまでの連携実績

これまでに、①民間企業との共同研究として、認知機能の加齢変化に関する基礎的研究、②行政機関からの受託研究として、集団版認知症スクリーニング検査の開発、③市民を対象とした老年学公開講座、などを行ってきました。